

山形県埋蔵文化財調査報告書第102集

諏訪前遺跡

発掘調査報告書

1986

山 形 県

山形県教育委員会

す わ まえ
諏 訪 前 遺 跡

発掘調査報告書

昭和61年3月

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和60年度に実施した、県営公害防除特別土地改良事業(吉野川流域)に伴う「諏訪前遺跡」の発掘調査の成果をまとめたものであります。

南陽市には全長96mの日本海側では北限の大型前方後円墳である稻荷森古墳があり昭和55年には国の史跡に指定されています。米沢盆地を支配した首長墓ともいわれています。また、本遺跡に隣接して「郡山」という地名が残っているところから、古代のいずれかの時期に置賜郡衙がこの地にあったことも想定されており、南陽市教育委員会が中心となって、その確認作業を進めているところもあります。本遺跡もこの関連調査によって発見されたもので、予算成立後という困難な状況であったにもかかわらず、工法変更による現状保存、そして、記録保存のための緊急発掘調査と事がスムーズに進みましたのも、関係者の御甚力の賜と厚く御礼申し上げます。

発掘調査の結果、稻荷森古墳成立前夜ともいべき古墳時代前期の集落であったことが明らかとなりました。こういった集落が営まれていたからこそ、稻荷森古墳が造営されたとも考えられます。

近年、埋蔵文化財と県民福祉の向上を目的とした諸開発事業との係わりは増加の傾向にありますが、県教育委員会では国民共有の財産である文化財を保護、活用し、さらに未来へ継承することが、重要な職責であると考え、今後とも銳意努力を重ねてまいる所存であります。本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及と、活用のための一端を担えれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査にあたって多大な御協力をいただいた地元の方々をはじめ、関係各位に心から感謝を申し上げます。

昭和61年3月

山形県教育委員会

教育長 高橋 和雄

例　　言

1 本書は山形県農林水産部の委託を受け、山形県教育委員会が昭和60年度に実施した「県営公害防除特別土地改良事業(吉野川流域)」に係る「調査前遺跡」の緊急発掘調査の報告書である。発掘調査は昭和60年7月22日から同年8月9日まで延15日間実施した。

2 調査にあたっては、南陽市教育委員会、山形県農林水産部、同置賜土地改良事務所などの関係機関のご協力を得た。また、現地調査、遺物整理において、加藤 稔氏、佐藤 鎮雄氏、吉野一郎氏にご指導、ご助言を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

3 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治〔山形県教育庁文化課埋蔵文化財主査〕

同上 佐藤 庄一〔山形県教育庁文化課埋蔵文化財係長〕

現場主任 渋谷 孝雄〔山形県教育庁文化課技師〕

事務局 事務局長 小閑 陽三〔山形県教育庁文化課課長〕

事務局長補佐 加藤 友信〔山形県教育庁文化課課長補佐〕

事務員 斎藤世都子〔山形県教育庁文化課主事〕

同上 中嵐 寛〔同上〕

同上 氏家 修一〔同上〕

4 掘図縮尺は遺構で40分の1、200分の1、遺物で2分の1、6分の1とし、それぞれにスケールを示した。また、図版中の遺物は甕は3分の1、その他は2分の1とした。

掘図の記号はSK—土壤、SD—溝状遺構、SX—落込み、F—遺構内堆積土を示す。

5 本書の作成は渋谷孝雄が担当・執筆した。なお、遺物の復元は莊司宏子の補助を得て渋谷と安部 実があたり、遺物の浄書には山口美和子の補助を得た。

6 本書の編集は長橋 至、渋谷孝雄が担当し、佐々木洋治が総括した。

目 次

| | | | |
|-------------|---|--------------|----|
| I 調査に至る経過 | 1 | 1 繩文時代の遺物 | 6 |
| II 遺跡の立地と環境 | | 2 古墳時代の遺構と遺物 | |
| 1 遺跡の立地 | 2 | 1 土壌 | 7 |
| 2 歴史的環境 | 2 | 2 溝状遺構 | 9 |
| III 調査の経過 | 2 | 3 性格不明の落込み | 12 |
| IV 遺跡の概観 | | 4 遺構外出土の土器 | 14 |
| 1 遺跡の層序 | 4 | 3 平安時代の遺物 | 15 |
| 2 遺跡と遺物の分布 | | VI 東区の遺構と遺物 | |
| 1) 西区 | 5 | 1 遺構 | 16 |
| 2) 東区 | 6 | 2 遺物 | 16 |
| V 西区の遺構と遺物 | | VII まとめ | 17 |

挿 図 目 次

| | | | |
|--------------------|---|--------------------|----|
| 第1図 諏訪前遺跡と周辺の遺跡 | 1 | 第11図 S D 2 平面・断面図他 | 10 |
| 第2図 調査区全体図 | 3 | 第12図 S D 2 出土土器(2) | 11 |
| 第3図 15—16・17区東壁断面図 | 4 | 第13図 S X 4 平面・断面図 | 13 |
| 第4図 西区遺構分布図 | 5 | 第14図 S X 4 出土土器(1) | 13 |
| 第5図 東区遺構分布図 | 6 | 第15図 S X 4 出土土器(2) | 14 |
| 第6図 繩文時代の遺物 | 7 | 第16図 遺構外出土の古墳時代の土器 | 15 |
| 第7図 古墳時代の土壤 | 7 | 第17図 平安時代の土器 | 15 |
| 第8図 S K 8 出土土器 | 8 | 第18図 S X 51平面・断面図 | 16 |
| 第9図 S D 1 平面・断面図 | 9 | 第19図 東区出土の中世陶器 | 16 |
| 第10図 S D 1 出土土器 | 9 | 第20図 古墳時代の土師器 | 17 |

図 版 目 次

| | | | |
|------------------|--|-------------|--|
| 図版1 遺跡近景・基本層序 | | 図版5 西区全景他 | |
| 図版2 S K 8 完掘状況他 | | 図版6 出土遺物(1) | |
| 図版3 S D 1 檢出状況他 | | 図版7 出土遺物(2) | |
| 図版4 S D 2・5 完掘状況 | | 図版8 出土遺物(3) | |

I 調査に至る経過

調査前遺跡は昭和60年4月5日に南陽市教育委員会が実施した「置賜郡衙跡推定地開発分布調査」によって遺物の散布が確認された新規発見の遺跡である。採取された遺物は縄文時代中期と奈良・平安時代の土器片であった。山形県教育委員会では、この遺物採取地点が、昭和60年度に予定されている県営公害防除特別土地改良事業(吉野川流域)の区域内に入る可能性があることから、県農林水産部置賜土地改良事務所に事業計画の聴取を行うとともに、遺跡の保護についての協議依頼を申し入れた。この結果、早急に60年度事業区内全域で試掘を含む遺跡詳細分布調査を実施し、遺跡の範囲や遺構確認面までの深さなど、遺跡の保護に必要なデータを収集した後、再度関係機関と協議することになった。

山形県教育委員会による試掘調査は昭和60年5月22日～24日の3日間にわたって実施され、昭和60年度の事業区内には調査前遺跡と唐越遺跡の2遺跡が存在することが明らかとなかった。5月末にこの調査結果を県農林水産部に報告するとともに協議を重ねた。この結果、唐越遺跡については除草後に現耕作土に客土する工法で、遺構・遺物を現状のまま保存することになったが、調査前遺跡のうち、客土工法の不可能な約5,000mについては、工事着工前に緊急発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。



第1図 調査前遺跡と周辺の遺跡(1:25,000)

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

白鷹丘陵の南端に源を発する吉野川は米沢盆地北部の南陽市宮内地区で扇状地を形成する。本遺跡の約300m東側を南東に流れる現河道は、この扇状地の扇面の東端にあたり、その東側には氷河時代の名残りをとどめる寒地性植物の繁茂する白竜湖を中心とする大谷地が広がっている。本遺跡遺構群の基盤は、低湿地堆積物の上に吉野川の氾濫によって押し出された土砂が堆積したもので、砂礫や粘土層が複雑に入り混じっている。数回にわたる水田の区画整理や盤下げによって削平され、現在は平地と化しているが、今回の調査によって、西区の南東隅から北西隅にかけて旧河道の自然堤防と考えられる帯状の高まりが確認され、遺構群の分布もこれを中心とする傾向が窺えた。標高は221m前後を測る。

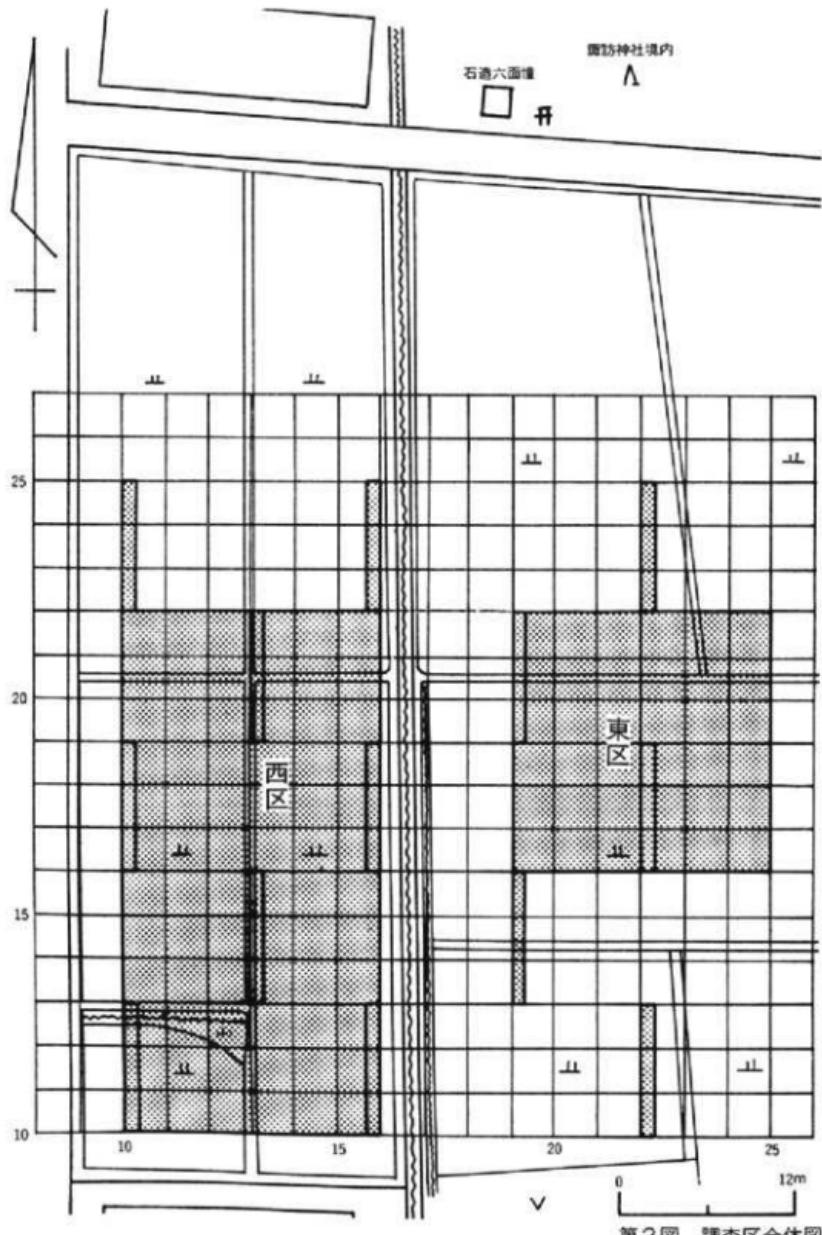
2 歴史的環境(第1図)

本遺跡の周辺には多くの遺跡が分布する。これらは吉野川扇状地の扇央から扇端の微高地に立地するものと、丘陵と平地の境界付近、それに独立丘上に立地するものに大きく分けられ、前者は弥生～奈良・平安、後二者は縄文時代のものが多い。本遺跡の南東2.5kmの「大谷地」の地下2mから発見された縄文時代前期の低地性集落である押出遺跡の調査(山形県教委1985)は沖積地の地下深く眠っている遺跡の存在を如実に示すもので、これまでの遺跡立地論を再考する必要性が生じてきている。したがって、この図幅で認められる時代別の立地の偏りから指摘できることは、弥生以降の集落はその多くが平野部に営まれたという事実である。

これらの遺跡のうち、国指定史跡である県下最大の前方後円墳の稻荷森古墳(3、保角1980)、古代置賜郡衙に関連するといわれる矢の目館遺跡(4、吉野1984)、古墳～奈良時代の集落跡である沢田遺跡(5、名和1985)では発掘調査が行なわれており、この地域が古墳時代以降、置賜地方でも中核の位置を占めていくことが明らかになりつつある。

III 調査の経過

発掘調査は昭和60年7月22日から同年8月9日まで延15日間実施した。調査は工事によって破壊される恐れのある部分のうち、分布調査によって比較的多くの遺物が出土した諏訪神社前方の水田約2,700m²を対象とした。この地区に磁北を基線として3×3mのグリッドを設定し、このグリッド軸に沿って1×9mのトレンチを13本設定して、手掘りで掘り



進め、遺構や遺物の分布状況の把握に努めた。この結果、農業用水路の西側(西区)の南部で多くの遺物が出土する傾向がみられた。また、水路を挟んで東側(東区)からも若干の遺物が出土したため、第2図に示したような拡張・精査区を設定して調査を進めたが、東区は後世の削平が著しく、南半を精査するにとどめた。調査・実測面積は810m²である。調査の経過は以下に示すとおりである。

7月22～26日

22日に器材を搬入し鍛入式、グリッド設定を行い、23・24日にトレンチ掘りを実施。24・25の両日に重機を投入して表土剥ぎを行い、26日まで併行して面整理を行う。

7月29～8月2日

8月1日まで西区のII、III層の掘り下げ、面精査を行い、古墳時代の土壤、溝状遺構、ピットなどを検出した。その後、東区の掘り下げも行ったが削平が著しく、時期不明の大きな落込み、ピットを検出したが、遺物は少ない。2日から遺構の精査を開始する。

8月5～9日

先週検出した遺構の精査を行い、併行して実測図の作成、写真撮影を行った。8日に現地説明会を行い、約30名の参加があった。9日に器材を撤収して調査を終了する。

IV 遺跡の概観

1 遺跡の層序(第3図)

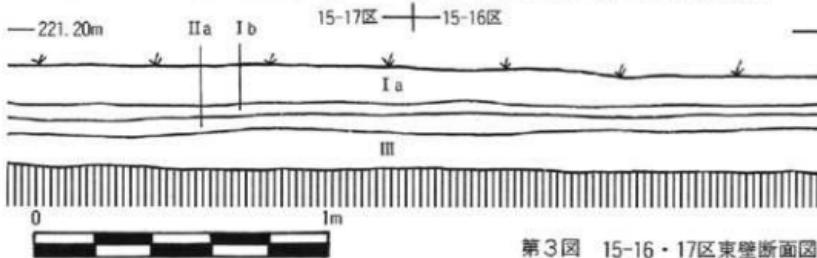
西区の遺構検出面までの層序は大きく3層に分けられ、東区は以下に示すII層、III層を欠いている。第3図は15-16、17区東壁の層位断面図である。Y-21列以北には、IIa層の下部にN1.5/黒色粘土のIIb層が加わり、Y-12以南ではIIa、b層とも欠除している。

Ia層 5 Y3/2 オリーブ黒色シルト質粘土(水田耕作土)

Ib層 10 YR2/3 黒褐色粘土(酸化鉄が付着し赤味を帯びている。水田底土)

IIa層 2.5 Y3/1 黒褐色シルト質粘土(砂礫を多量、風化砾を若干含む)

III層 10 YR1.7/1 黒色粘土質シルト(砂礫、風化砾を多量含む。遺物包含層)



第3図 15-16・17区東壁断面図

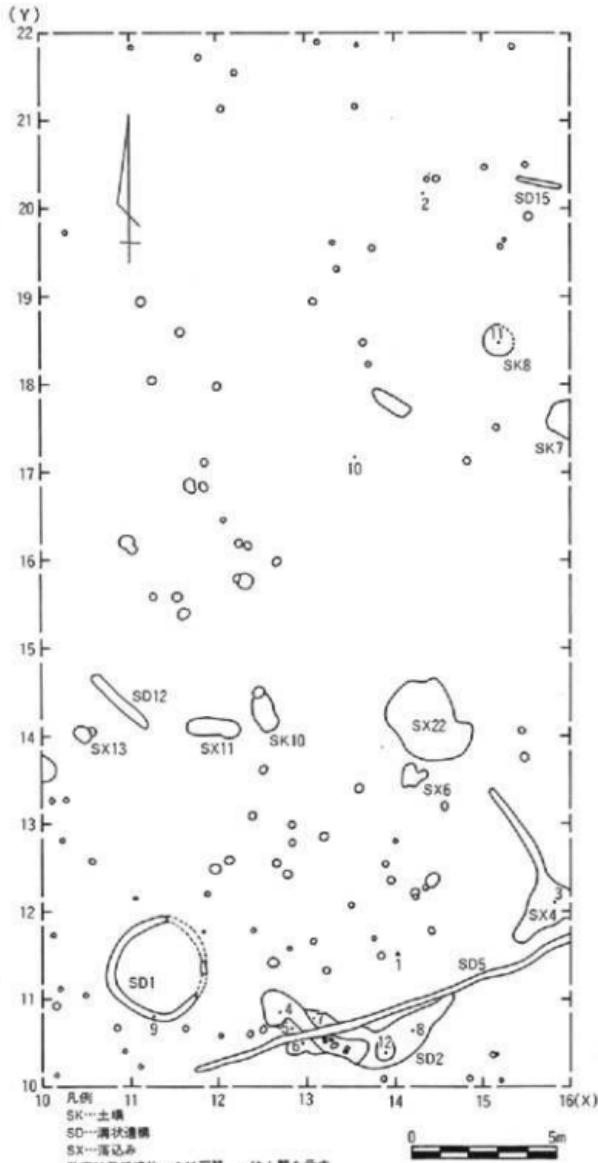
2 遺構と遺物の分布

1) 西区(第4図)

西区からは土壙3基、溝状遺構が5条、性格不明の落込みが5基、ピット90余個を検出した。これらの遺構のうち、土壙や溝状遺構、落込みからは古墳時代の土師器の一括土器や土器片が出土しており、その多くは古墳時代の遺構と思われる。遺物の出土したピットは4個だけであるが、いずれも古墳時代の土師器であった。

出土した遺物は平箱にして9箱分である。繩文土器片、石器、古墳時代の土師器、平安時代の須恵器、赤焼土器に分けられるが、古墳時代の土師器以外は、いずれも10点以下の出土量である。

遺構は第4図に示したような分布状況となっており、SK7、8の土壙2基を除けば、その主要遺構の多くは精査区の南半に集中している。前述したように、精査区の東南隅から北西隅にかけて



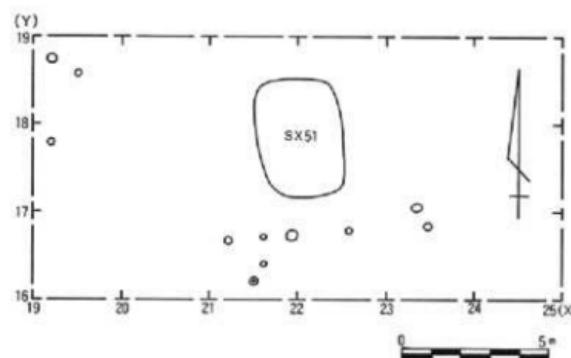
第4図 西区遺構分布図

地山の砂礫層のせり上がった尾根状の高まりが認められ(図版5下段参照)、この周辺に多くの遺構が存在している。今回の調査対象区は大きく削平されており、遺構確認面はすでに各遺構の底面に近い部分なのかも知れない。こういった観点で見ると、10~12-15、16区内にある4本一組と考えられるピット群(図版5)は建替えのある堅穴住居跡の主柱穴の可能性も生じる。

登録した一括遺物の分布状況は第4図に示したが、その他の破片もY-12以南、とくにS D 2、S X 4の周辺からの出土が目立った。Y-13以北ではR P 10の出土した13-17区以外は、多くても1グリッドあたり10点以下である。

2) 東区(第5図)

東区では拡張区の南半の精査を行ったが、西区よりさらに15~20cmの削平を受けており、堅穴状の落込み1基とピット11個を検出するにとどまった。出土した遺物は表土直下から検出された中世陶器片3点だけである。



第5図 東区遺構分布図

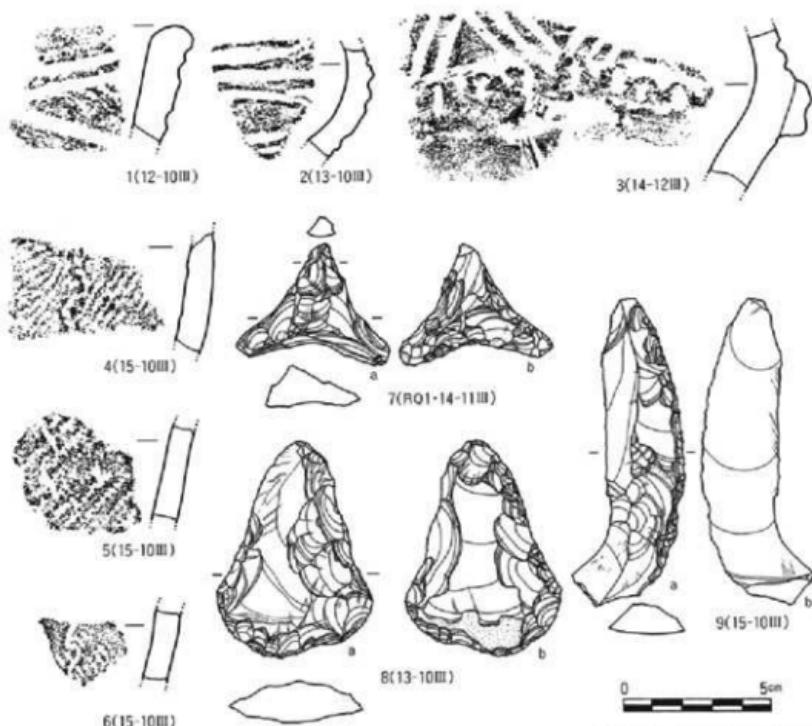
V 西区の遺構と遺物

1 繩文時代の遺物(第6図)

縩文時代の土器、石器は基本層位のIII層から出土した。土器片、石器とも磨滅が認められ、一次的な包含地から移動して再堆積したものと考えられる。

1は波状口縁を成す深鉢の口縁部破片で2条の沈線が波状突端から垂下している。地文はR L縩文である。2、3はキャリバー形の器形になる深鉢の破片で、3には隆帶上に交互刺突文、その上位に押し引きによる沈線が施されている。4~6はいずれも継続文をもつ体部破片で、地文はR L縩文である。これらの土器片は縩文時代中期初頭大木7a式に併行する。

7は三脚石器である。凹面をなすb面の加工が新しい。8は両面加工の範状石器で、a面側の加工が新しい。9は縦長削片の一側縁に連続的な加工を施して刃部を作成した削器である。これらは土器と同時期と捉えて矛盾はない。

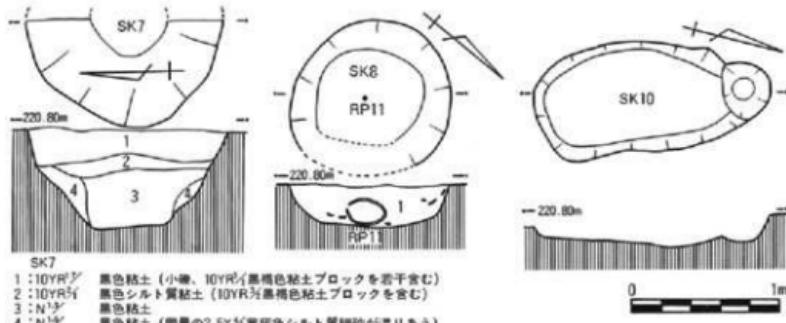


第6図 縄文時代の遺物

2 古墳時代の遺構と遺物

1) 土 墓(第7、8図)

古墳時代の土壙は3基発見された。確認面はいずれもIII層直下である。



第7図 古墳時代の土壙

7号土壤

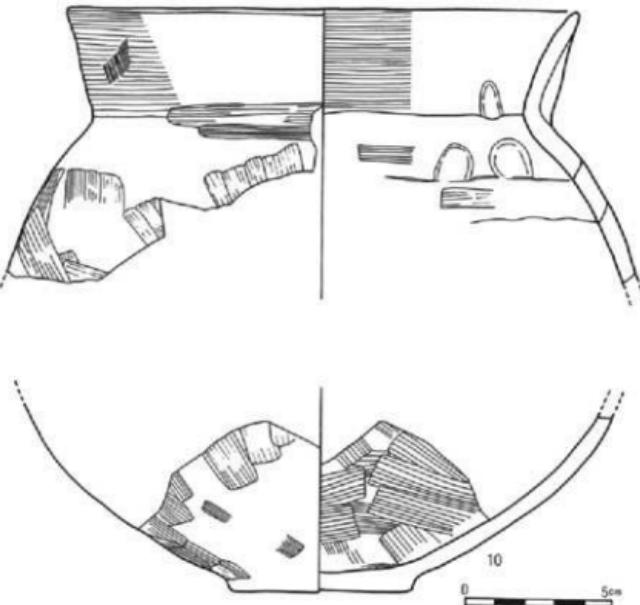
15—15区で発見された円形プランの土壤である。東半は未掘である。直径135cm前後で深さは65cm、底面はやや北側に向かって傾斜している。堆積土は4層に分けられ、2層から土師器甕の体部破片が4片、4層から壺の体部破片が1片と甕の体部破片が3片出土した。

8号土壤

15—18区で検出された円形プランの土壤である。北東部が試掘調査時のトレンチにかかっている。直径105cm、深さは30cm、底面は鍋底状を呈する。堆積土は疊、風化疊、粗砂を多量に含むN1.5/黑色粘土の単一層である。

底面に密着してほぼ完形の土師器甕が1個体(RP 11)、それに南西側から流れ込むような状態でもう1個体の甕が出土した(図版2参照)。しかし、底面出土の甕は風化が著しく、復元・実測はできなかった。

第8図は流れ込みの甕である。体部中央を欠くが、同一個体である。口径17.5cm、底径6.3cmをはかる。口縁部は外反し、この部分に粘土を貼り付けて肥厚させている。体部中央は大きくふくらむ様相を示す。口縁部は内・外面ともヨコナデ、体部はヘラナデの調整が施される。内面頸部直下から体部中央にかけては粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残り、指頭によるオサエが観察されるが、部分的にヘラナデの痕跡が残るほかは目立った調整は認められない。内面体部下半から底部にかけては刷毛目が施されている。



第8図 SK8 出土土器

10号土壙

12~14区で検出された長楕円形のプランをもつ土壙である。北部でピットに切られている。長径145cm、短径75cm、確認面からの深さは20cmをはかる。底面は若干の凹凸がある。堆積土は10Y R1.7/1黒色粘土質シルトの単一層で、この中から土師器壺の体部破片が1点、壺の体部破片が27片出土している。

2) 溝状遺構

溝状遺構は5条検出されたが、このうち5号溝状遺構はIII層を切っており、新しい時期の所産である。

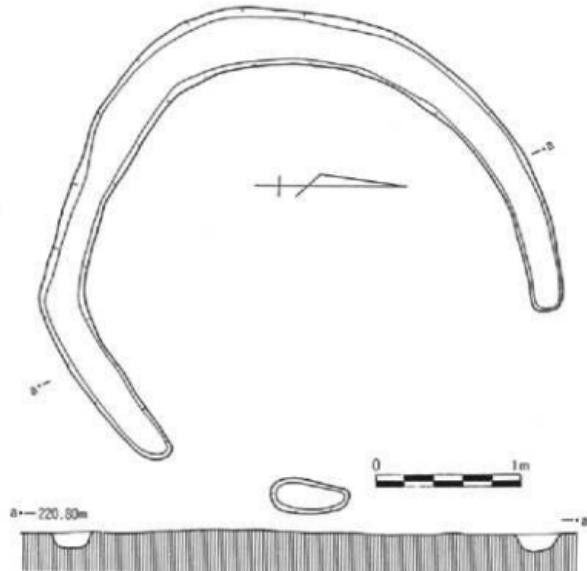
1号溝状遺構(第9・10図)

10・11・10・11区で検出された、円形に巡る溝である。遺構確認段階では堆積土上面に縄文土器片と剝片が認められたため、縄文時代の住居跡の周溝とも考えられたが、精査によって土師器が出土したことにより、古墳時代の溝と判明した。幅

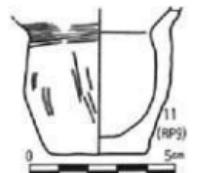
25~40cm、深さ10cm前後で、外法の径が3m40cm前後である。堆積土は風化礫を若干、粗砂を多量に含む10Y R1.7/1黒褐色シルト質粘土の単一層で、この層の中間付近から、第10図に示した、小形手捏ねの土師器壺が出土した。口縁部が欠損するが、恐らく口径6cm前後、器高5.5cm前後になるものと推定できる。頸部外面にヨコナデ、体部には刷毛調整の痕跡を残している。

2号溝状遺構(第11・12図)

12~14・10・10区で検出された平面形が「く」の字状のカーブを描く溝である。5号溝

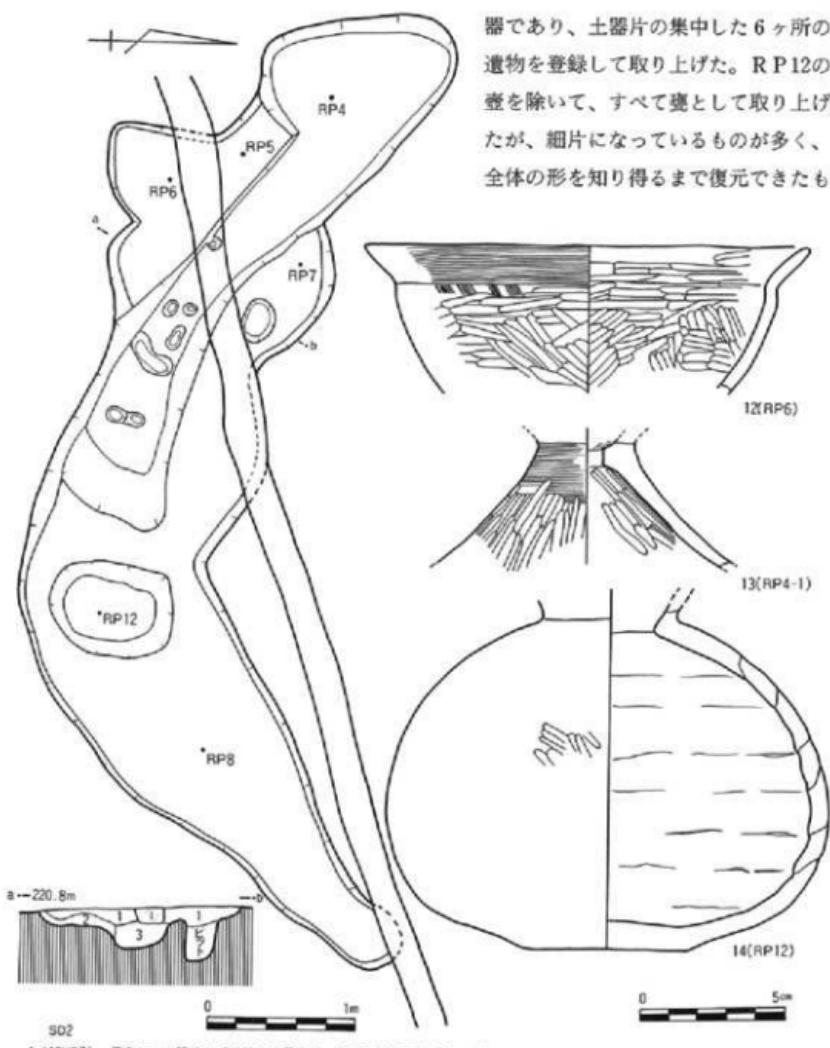


第9図 SD1 平面・断面図



第10図 SD1 出土土器

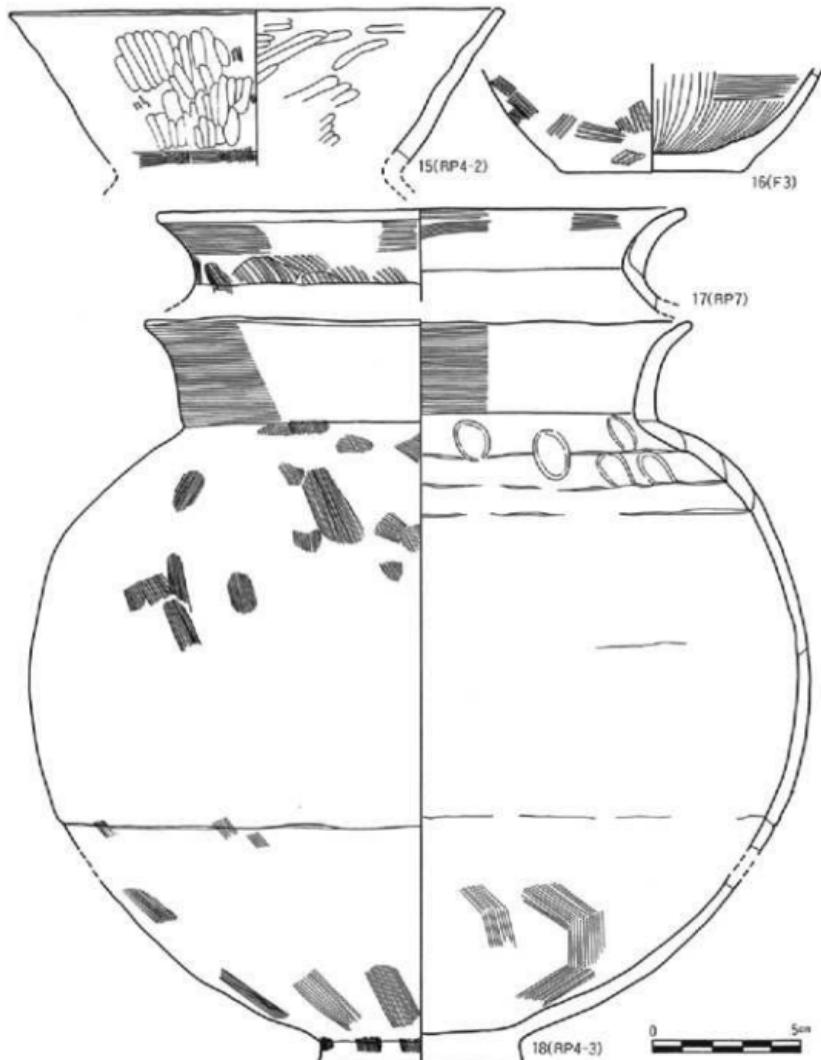
状遺構に切られている。最大幅 1 m50cm、総延長は 7 m60cm をかる。底面は東半が比較的平坦であるが、一段深い部分をもつ西半は凹凸が激しい。堆積土は 3 層に分けられ、1・2 層から、今回の調査の遺物総量の約半数にあたる 4 箱分の遺物が出土した。すべて土師器であり、土器片の集中した 6ヶ所の遺物を登録して取り上げた。RP12 の壺を除いて、すべて甕として取り上げたが、細片になっているものが多く、全体の形を知り得るまで復元できたも



第11図 SD2 平面・断面図、同出土土器(1)

のは少ない。壺、器台、壺、甕の各器種が確認された。

12は壺である。口縁部が強く外反する塊状の器形となる。口縁部外面にはヨコナデ、体部外面と内面には丁寧なヘラミガキが施されている。また、これらの調整の前に、刷毛目調整が施されていることが、屈曲部に残る痕跡から知ることができる。13は器台である。



第12図 SD2 出土土器 (2)

脚部は裾部が大きく広がる円錐台状になると考えられ、脚部と受け部間には直径1.2cmの貫通孔が認められる。部分資料のため、円窓があるのかどうか不明であるが、少なくとも脚部の2cm下位までの部分には認められない。14・15は壺である。14は口縁部を、15は頸部以下を欠く。14は体部下半に最大径があり、頸部が収縮する玉葱状の器形となる。最大径は15.1cm、頸部径は4.6cmをはかり、口縁部が外傾する様相を見せている。器面は剥落が著しいがヘラミガキが認められ、その後、丹影が施されている。内面には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残り、調整はない。15は口径17cmをはかる中形の壺である。頸部から直線的に外傾する器形となり、外面は刷毛目調整の後、ナデが施され、最終的に丁寧なヘラミガキが施されている。内面は剥落している部分が多いが、ヘラミガキが認められる。16～18は甕である。16は底部、17は口縁部資料である。16は底径が6.2cmで、内・外面とも刷毛目調整が施されている。17は口径18cmの口縁部が外反する甕である。外面は刷毛目調整の後、ヨコナデが施され、内面はヨコナデが施されている。18は口径18.6cm、底径7.0cm、器高25.5cm前後をはかる。口縁部は直立気味に立ち上がった後に鋭く外反し、体部は球形に張る器形となる。体部下半には上半との接着の際の浅い段が看取され、土器製作に段階的な工程があったことを暗示させる。口縁部は、内・外面ともヨコナデが、体部外面には刷毛目調整、内面上半には指頭によるオサエ、下半には刷毛目が施されている。

S D12(第4図)

10・11～14区で検出された幅30～40cm、深さ15cm、長さ2.6mの南東から南西に向かう溝である。堆積土は砂礫を含む10Y R1.7/1黒褐色シルト質粘土の単一層である。遺物は出土しなかつたが堆積土の類似から古墳時代の溝と判断した。

S D15(第4図)

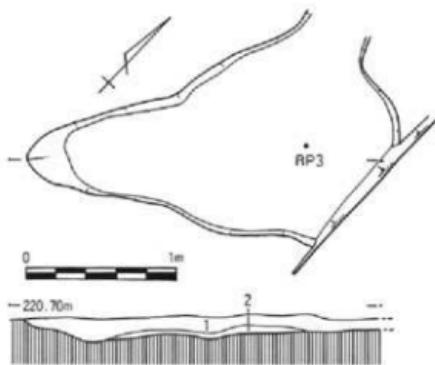
15～20区で検出された幅15～20、深さ20cm前後、長さ1.6mの東南東から西北西に向かう溝である。堆積土は風化した小砾を多量含む10Y R1.7/1黒褐色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

3) 性格不明の落込み(第4・13～15図)

不整なプランをもつ落込みは5基検出された。このうち、4、6、11、13号の各遺構から古墳時代の土器が出土した。堆積土は4号落込みを除けばいずれも単一層で、各々以下に示すとおりである。6号—10Y R2/1黒色砂礫、11号—10Y R2/2黒色粘土質シルト、13号—10Y R1.7/1黒色粘土、22号—10Y R2/3黒色粗砂。以下に4号落込みについて述べる。

15～11～13区で検出された北西方向に溝状遺構を伴う不整なプランをもつ。この溝状の部分は幅25～30cm、深さ15cm、長さ3.5mをはかる。これを除いた部分は第12図に示した。堆積土は2層に分けられ、1層から土師器片がまとめて出土した(R P 3、図版5参照)。

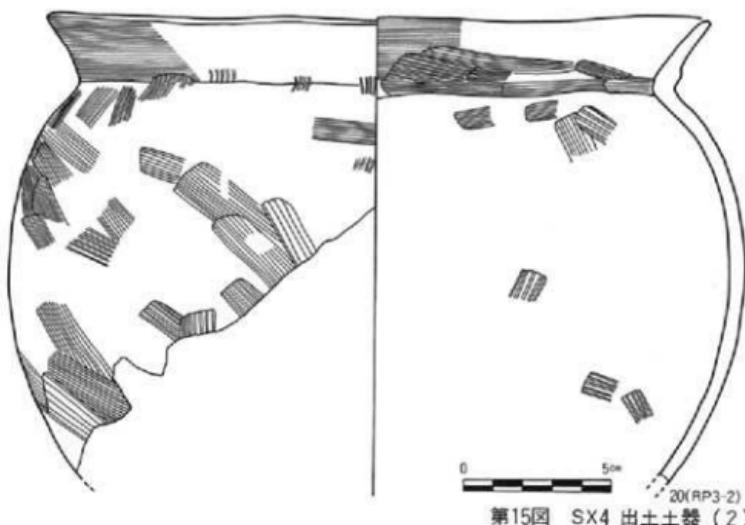
このRP3は2個体の壺となった。19は複合口縁となり、全体的に器壁が薄く精巧なつくりとなっている。口唇部と体部下半以下が欠損する。複合口縁をなす口縁部は、やや外傾し、頸部で収縮し体部上半部に最大径を有する。推定口径が21.4cm、最大径25.8cmをはかる。この土器の最も大きな特徴は体部下半にも複合口縁のつくりに似た段をもつことである。この段は体部下半



第13図 SX4 平面・断面図



第14図 SX4 出出土器（1）



第15図 SX4 出土土器（2）

以上の部分に下半をソケット状に挿し込んだことによって生じているのであるが、第11図18のような接着部分を消すような調整は全く見られず、逆に意識的につくられた段と見ることができる。体部下半の状況が不明であるが、この段に積極的な意味を持たせると、あるいは壊であった可能性もある。現在までの知見による限り、このようなつくりを示す壊はないので、ここでは壊とした。外面は刷毛目調整の後、口縁部にはヨコナデ、体部には丁寧なヘラミガキが施され、部分的に丹彩の痕跡が残っている。内面は器面の剥落が著しいため調整は明らかではないが、粘土紐の接着部の痕跡は認められない。

20は単純口縁の壊であり体部下半以下を欠く。口縁部は外反し体部は球形を示す。口径は22.5cm、最大径は25cmをはかる。内・外面とも刷毛目調整が施され、口縁部にはさらにヨコナデが施されている。また、口縁部内面にはヘラナデが認められる。

4) 遺構出土土器(第15図)

古墳時代の遺構外から出土した土器は登録した土器RP10も含めて、ほとんどが細片であったが、接合・復元の結果、図示可能なものもあった。

21は高壊もしくは器台であるが断定はできない。壊部もしくは受け部の内面は刷毛調整が施されている。

22は口径10cmで、この位置に最大径のある小形の広口壺である。同一個体の底部があるが径4.6cmの平底となる。内外面とも器面の剥落が著しいが、外面口縁部には横方向に走るヘラミガキが施されている。体部も最終的にヘラミガキ調整が施されたが、部分的に刷毛

目調整の痕跡が残
っている。

23は口径16.8cm
の単純口縁の壺で
ある。体部はふく
らみを持つ球形に
なり、口縁部は直
立気味に立ち上が
ってから外反して
いる。内・外面と
も刷毛目調整後に
頸部下までヨコナ
デが施され、接合
はしなかったが、

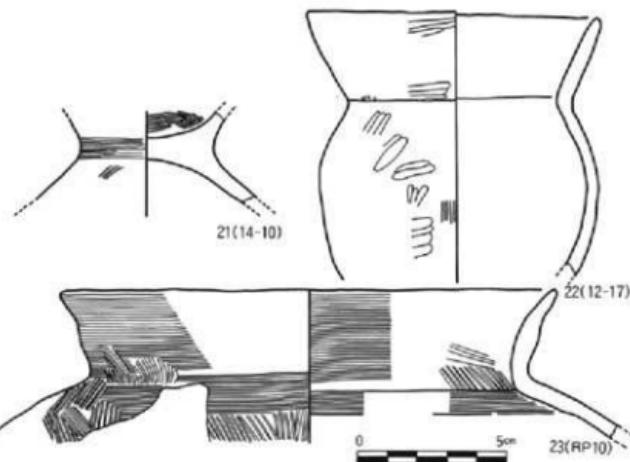
体部破片には内・外面とも明瞭な刷毛目が観察される。

3 平安時代の遺物(第16図)

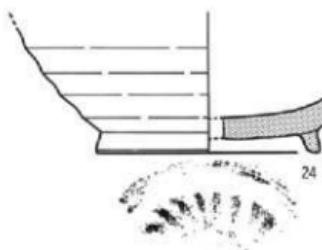
西区からは数点の平安時代の土器が出土した。赤焼土器と須恵器がありすべて遺構外から
の出土である。

24は赤焼土器の高台付壺で口縁部を欠いている。外面はロクロによる凹凸が顕著である
が内面はナデによって平滑に仕上げられている。底部外面には高台の接着に伴う菊花状の
ナデツケが認められる。この他赤焼土器ではRP2とした回転糸切りの壺がある。

25、26は須恵器である。25は外面に平行タ
タキが認められる壺の体部破片、26は壺の底
部資料である。この他須恵器ではヘラ切りの
壺の底部破片が出土している。



第16図 遺構外出土の古墳時代の土器



第17図 平安時代の土器

これらは9世紀後半から10世紀代頃の所産と考えられる。

VI 東区の遺構と遺物

1 遺構(第5・18図)

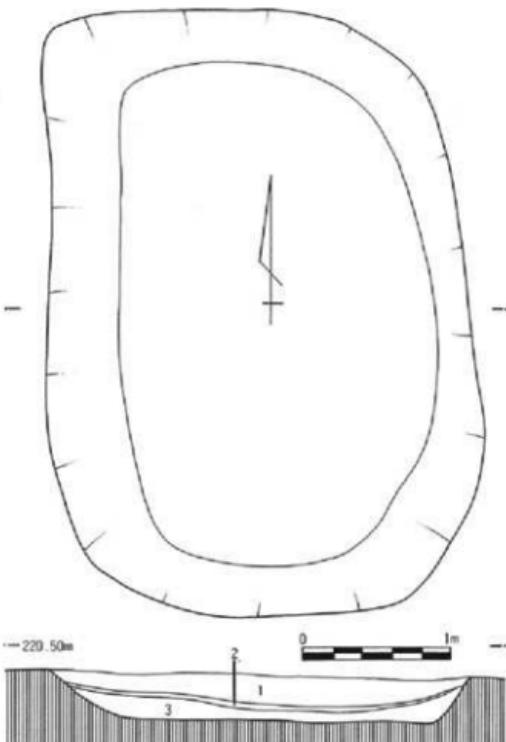
東区では竪穴状の落込み(S X51)とピット11個を検出した。ピットは径20~40cm、深さ10~20cmで、その堆積土は7.5Y7/2灰白色粘土のブロックを含む10Y R2/1黒褐色粘土である。径8cmの柱根を伴うものもあった。これらの配列は不規則で、建物としての把握は困難である。

S X51は南北4.15m、東西2.9mの隅丸長方形のプランをもつ竪穴状の落込みである。底面はほぼ平坦で全周でゆるく立ち上がりっている。堆積土は以下のとおりである。1層—10Y R2/2黒色粘土、2層—7.5Y5/1灰色粘土、3層—10Y R1.7/1黒色粘土。遺物の出土はなく、所属年代は不明である。

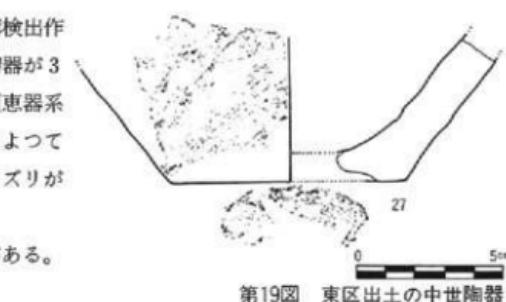
2 遺物(第19図・図版8)

遺構に伴う遺物はないが、遺構検出作業によって、表土直下から中世陶器が3片出土した。27は還元焰焼成の須恵器系中世陶器の底部で、静止糸切りによって切り離され、体部下半部にヘラケズリが施されている。

この他、図版8に示した破片がある。



第18図 SX51 平面・断面図



第19図 東区出土の中世陶器

VII まとめ

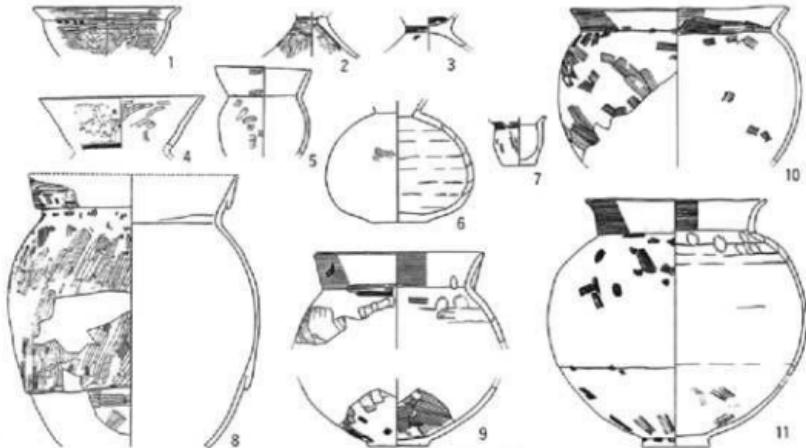
今回の調査は、県営公害防除特別土地改良事業(吉野川流域)に係る緊急発掘調査である。発掘面積は810m²で、後世の削平が著しく、目立った遺構は検出できなかったが、この地域では從来、まとまった資料がなかった古墳時代前期の土師器が出土した。厳密な意味での一括資料とは言えないため問題も残るが、この土器について若干触れてみたい。

器種は壺(第20図1)、器台(2・3)、壺(4~6)、甕(7~11)が確認された。個々の説明はV章で述べたので省略するが、各器種の器形・調整方法は山形県では宮町式(加藤1968、1973)、宮城県では塙釜式(氏家1957)と呼ばれている土器の特徴とほぼ一致する。宮城県内の塙釜式土器は提唱者の氏家和典氏によって細分の可能性が説かれ(氏家1972)て以来、一括資料をもとにした具体的な作業が始まり(丹羽他1974、手塚1980、太田1980)、現在では大きく三段階の時期区分が提唱され、各器種の変遷も整理されている。(丹羽1983、1985)。この丹羽 茂氏の説明に従って本遺跡出土の各器種を検討してみる。

壺は器形からは第II B段階に類似性を指摘できる。しかし、ヘラミガキは丁寧な仕上げとなっており、第I段階まで遡り得る。

2に示した器台は貫通孔をもち、脚部が大きく広がる円錐台状を示すこと、脚部内面にヘラミガキがあることから第III段階までは降らないとみられる。3は器台とすれば第III段階、高壺とすれば第II B段階以降となる。

壺では頸部が強くすぼまる6は第I段階の特徴をもち、4、5も降って第II B段階であろう。



第20図 古墳時代の土師器 (6分の1)

甕は口縁部が肥厚する特徴(9、10)は第III段階にはみられず、また、体部下半の稜(11)も第III段階までは降らないことを示す。

以上、本遺跡から出土した土師器の各器種の器形や器面調整は丹羽氏の細分による「塙釜式」の第I、II A、II B段階特徴を持っている。そしてSD2から出土した1、2、4、6、11のうち、1の器形にやや問題を残す他は第I段階まで通り得ると考えられるが、なお、全体的な資料不足の感は免れない。山形県内では山形市西高敷地内(佐藤他1979)、同坊屋敷遺跡(佐藤他1981)、河北町下横遺跡(長橋1981)等で住居内の一括遺物が検出されており、これらの検討も含め、今後の課題としたい。

参考・引用文献

- 氏家和典(1957)：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14撰
加藤 稔(1968)：「B 山形盆地における土師器の編年」『山形市史別巻1 嶋遺跡』 山形市
氏家和典(1972)：「南奥羽地域における古式土師器をめぐって」『北奥古代文化』第4号
丹羽 康・柳田俊雄・阿部 恵(1974)：「西野田遺跡、「東北新幹線関係道路調査報告書Ⅰ」」宮城県文化財調査報告書第35集
阿部明彦(1975)：「V 遺物 2 土器」「上山市牧野遺跡」
佐藤庄一・尾形典典・阿部明彦(1979)「山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第17集
保角里志(1980)：「福島森古墳一昭和54年度調査概報」 山形県立博物館
手塚 均(1980)：「留沼遺跡」「東北新幹線関係道路調査報告書Ⅳ」 宮城県文化財調査報告書第65集
太田昭夫(1980)：「大構遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」 宮城県文化財調査報告書第71集
佐藤正後・佐藤庄一・渋谷孝雄(1981)「柏倉地区遺跡群発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第33集
長橋 至(1981)：「下横遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第39集
阿部明彦(1982)：「第4章 繩文時代中期」「村山市史別巻1 原始・古代編」 村山市
丹羽 康(1983)：「宮前遺跡」「朽木横穴古墳群・宮前遺跡」 宮城県文化財調査報告書第96集
吉野一郎(1984)：「郡山尖の目鏡遺跡」 南陽市埋蔵文化財調査報告書第1集
名和進則(1985)：「沢田遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第88集
丹羽 康(1985)：「今熊野遺跡」「今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越遺跡」 宮城県文化財調査報告書第104集
山形県教育委員会(1985)：「押出遺跡調査説明資料」



調査前遺跡近景



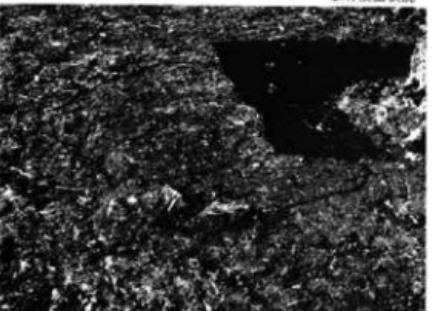
基本層序



SK7検出状況



SK7セクション



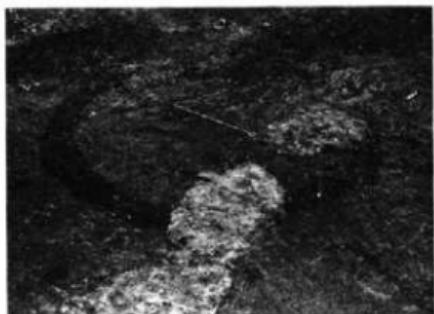
SK8検出状況



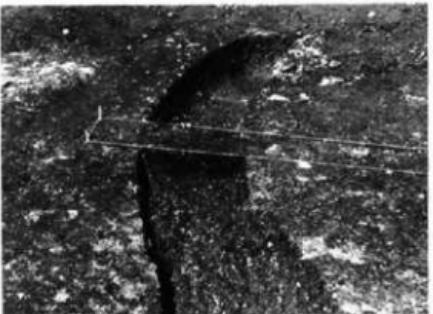
SK8セクション



SK8 残骸状況



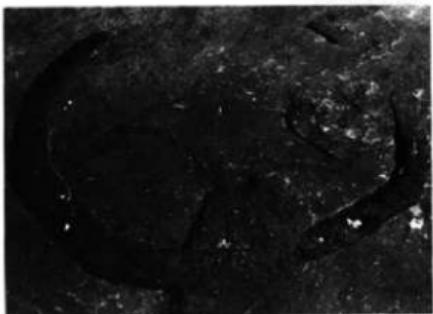
SD1 検出状況



SD1 セクション



SD1 RP9 出土状況



SD1 完整状況



SD2 検出状況



SD2-5 セクション



SD2 RP4 出土状況



SD2 RP12 出土状況



SD2-5 完損状況（西から）



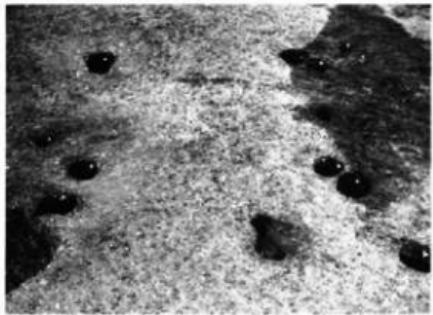
SD2-5 完損状況（東から）



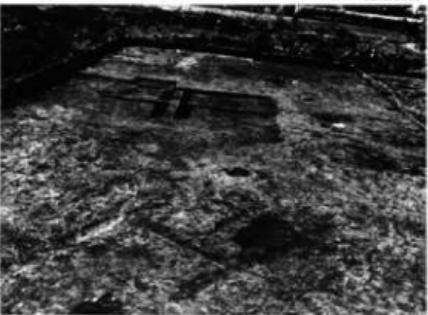
SX4 RP3 出土状況



SX4 完掘状況



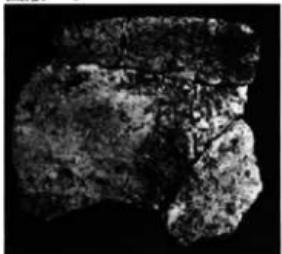
ピット群完掘状況



東区調査状況



西区全景（北から）



12



22



13



14



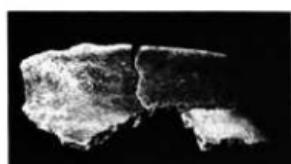
15



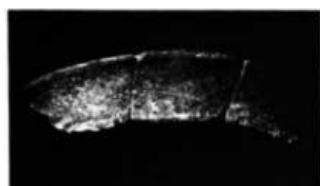
11



20



23



17



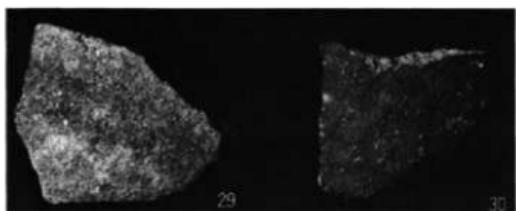
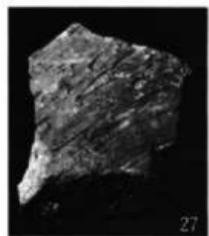
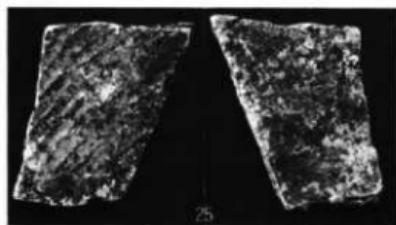
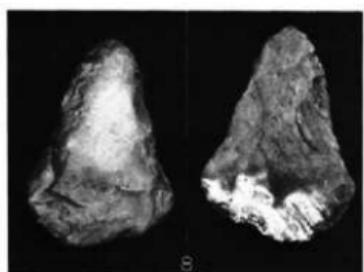
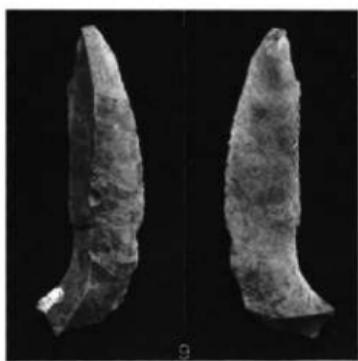
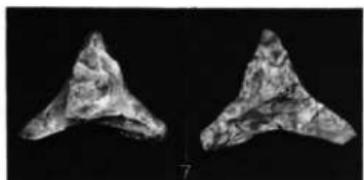
18



10



19



山形県埋蔵文化財調査報告書第102集

す わ まえ
謙 訪 前 遺 跡
発 掘 調 査 報 告 書

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月25日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 株式会社田宮印刷所
